蔵書から見る樟蔭高等女学校の教育：創立(1917)からおよそ10年間に着目して

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2021-11-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 嶋崎, さや香
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4624

蔵書から見る樟蔭高等女学校の教育
—創立（1917）からおよそ10年間に着目して—

嶋　崎　さや香

キーワード　女子教育　図書館　蔵書　樟蔭　伊賀駒吉郎

はじめに

大正末から昭和初期にかけて、女子への高等教育の重要性が認知される中で、女学校や女子専門学校が急増する。現在の大阪樟蔭女子大学の前身である樟蔭高等女学校も、この女子高等教育拡張期の1917年に、府下最大の高等女学校として創立された(1)。

その教育理念は「建学の精神」にあるように「充実した設備、秀れた指導者、良好な教育環境を整えて、現代社会の進歩に対応し得る高い知性と豊かな情操とを兼ね備えた、女性としての円満な人格を形成させる」ことにあった(2)。

では、この理念はどのような物質的基盤に支えられていたのだろうか。本稿ではその基盤としての図書室蔵書に着目する。具体的には、蔵書を構成する資料の出版時期や積極的に収集された分野は何か、また女学校教育とどう関わっていたかについて検討する。

高等女学校の図書館を検討したものには、鞆谷純一「三好高等女学校「婦人図書館」」がある。鞆谷は検討時期を図書館の「創設期」、「優良賞図書館期」、「遺志継承期」にわけ、校長高津半造に焦点を当てながら、その変遷を明らかにしている(3)。また澁谷歩「宮城県塩釜女子高等学校図書室の蔵書考」は、戦前から戦後にかけての同学校図書室と「図書の移動」を追いながら、蔵書印を紹介している(4)。この他に、実践女子大学や跡見学園などの学校史にも、高等女学校時代の図書館について紹介しているものがある(5)。しかしこれらの先行研究が扱う蔵書の分量は数十冊と少なく、また蔵書の性質や教育との関わりについても言及していない。

こうした中で、特に注目すべき先行論文として磯部敦（他）「大礼記念文庫の書籍文化環境」がある(6)。磯部は奈良女子高等師範学校に設けられた「大礼記念文庫」に着目し、その創立過程や選書基準、蔵書を検討する。その結果、同文庫には「「婦徳」を涵養しようとする、奈良女子高師の教育的な思惑が反映されてい」たことを指摘する(7)。学校図書館の蔵書が教育装置としても機能することを示す非常に重要な指摘と

いえる。

本稿でも、この教育装置としての学校図書室蔵書に着目する。現在の、大阪樟蔭女子大学図書館には『図書原簿』と題された所蔵目録が残されている。ここに記録された蔵書の分析を通じて、樟蔭高等女学校が目指した教育内容の一端を明らかにしたい。

1. 樟蔭高等女学校の沿革と図書室の変遷

樟蔭高等女学校（以下、樟蔭高女）は1917（大正6）年12月に、現在の東大阪市に創立された私立高等女学校である。1926年には樟蔭女子専門学校も開かれ、さらに1949年に大阪樟蔭女子大学として発足した[8]。本科は12歳から16歳、専攻科は17歳から18歳の生徒が通っていた。

創設者は大阪市内有数の材木商であった森平蔵（1875－1960）である。材木商の他にも、汽船会社や鉄道会社経営などで財をなした人物である[9]。

また校長を務めたのは伊賀駒吉郎（1869－1946）である。伊賀は大阪府立島之内高等女学校校長を務めた後、私立甲陽中学校（兵庫県）を自ら創設し、校長に就任した。その後樟蔭高女の創立に携わり、開校から1946年まで樟蔭高女と樟蔭女子専門学校の校長を務めた[10]。

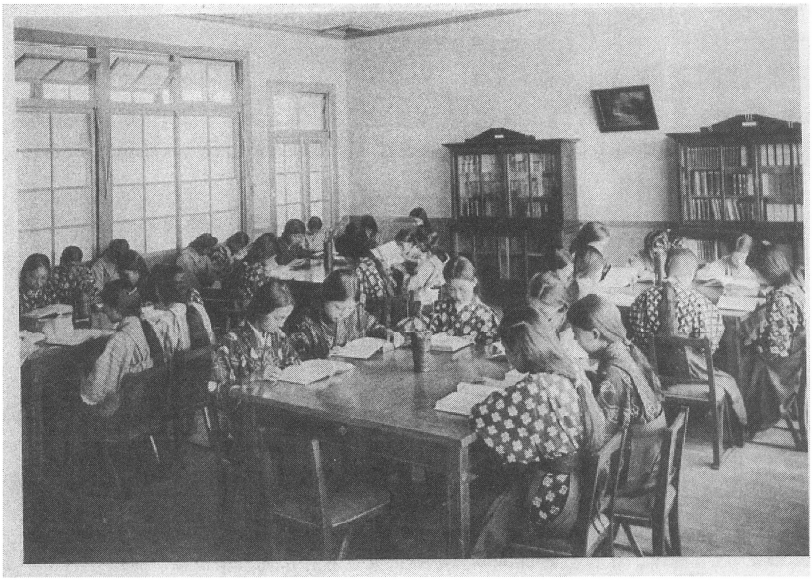
次に樟蔭高女の図書室の変遷を確認する。図書室は樟蔭高女の開校当時から校舎内に置かれていた。1918年に刊行された『私立樟蔭高等女學校新築落成記念帖』の校舎見取り図には「本科生図書室」と「会議室兼図書室」の記載がある[11]。また同書には図書室の写真（資料1・2）も掲載されている。

その後、学校創立10周年を祝うために「記念館」が建てられ、そこに「図書閲覧室」と「書庫」が置かれた。この建物と蔵書は、1949年に開校した大阪樟蔭女子大学の図書館に引き継がれる。大学の1953年の蔵書数は44,858冊（洋書4,350冊）[12]であったが、2016年現在は188,000冊（洋書61,000冊）[13]を所蔵する大学図書館へと発展している。

さて、本稿で検討するのは、1917年から1927年までの、樟蔭高女の図書室蔵書である。学校創立からおよそ10年間に収集された資料群である。それらの蔵書は、大学図書館所蔵の『図書原簿』より明らかにすることができる。

この時期の図書室蔵書について、研究が進んでいるとは言いがたい。樟蔭学園が発行する記念号（『樟の輝き』『樟蔭学園80周年記念誌』等）には、図書室の写真や校長伊賀駒吉郎による図書収集エピソードが紹介され[14]、大学図書館が作成した『図書館年譜』に、その前身が「「樟蔭女子専門学校」の図書室に始まる」との記述が見うけられる程度である[15]。もちろん、蔵書内容についての検討はこれまでなされてこなかった。

以上のことから、本稿では樟蔭高女の蔵書に着目し、その傾向を分析するとともに、



資料１：本科生図書室（1918）

資料２：会議室兼図書室（1918）

教育内容との関わりという観点からも考察を進めていく。

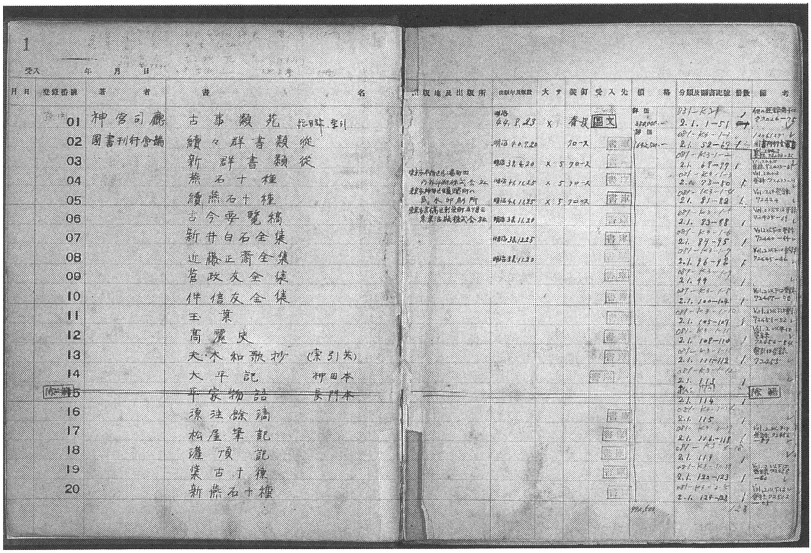
2. 検討対象

本稿における考察の基礎資料となるものは『図書原簿』（以下、『原簿』）である。まずは『原簿』の概要と検討範囲を説明する。

『原簿』は受入順の蔵書目録で、2018 年現在、大学図書館事務室に 48 冊が保管されている[16]。背表紙には、古いものから順に、「1」から「48」までの通し番号が振られている。内容としては、1927 年から 1994 年までの間に受け入れられた書籍が、1 番から 234,129 番まで記録されている。

各ページの冒頭には、受入年月日の記入欄があり、さらに月日、登録番号、著者、書名、出版地及出版所、出版年及版数、大サ、装釘、受入先、価格、分類及図書記号、冊数、備考と記録項目が並ぶ（資料 3）。ちなみに「大サ」の項目には資料の縦横の長さが記されている。さらに除籍された資料には二重線がひかれ、その上に「除籍」印が捺されている。

つまり、『原簿』には図書室に蔵書として受け入れた全ての書籍が記録されているのである。そのため、除籍された資料や、紛失した資料など、現存しない資料をも含めた蔵書全体の再構築が可能となる。この点において『原簿』記録は、時々の図書館蔵書を知り、大学の教育内容を窺うための大変貴重かつ重要な資料と言えるだろう。



資料 3：『図書原簿 1』の 1 頁目

ただし『原簿 1』に関しては、「出版年」や「出版社」等が無記入のものが多くみられる。特に「受入年月日」は、時々の学校教育と蔵書形成の関わりを検討する上で重要な情報である。しかし、この項目が未記入、あるいは記入された日付が前後している部分も多く、検討範囲の確定が難しい[17]。

では、どのような方法で検討範囲を決めることが出来るだろうか。特に図書館蔵書に関わる項目を、以下に箇条書き的にまとめた。

- 『原簿 1』の受入年月日の始まりが、1927 年 9 月 28 日である。
- そのため「樟蔭女子専門学校図書室」開始と同時に『原簿 1』が作成されたと推測される。
- さらに『原簿 1』の 1 頁から 117 頁までは受入年不明、あるいは日付が前後している資料が一括して記されている。
- 受入年不明の本は、1927 年以前から所蔵されていた資料と推測され、2321 件ある。
- ただし「受入年月日」に 1928 年と記された 19 件を除外するため、検討対象は 2302 件となった[18]。

先にも述べたとおり、検討対象となるこれらの蔵書は、樟蔭高女が開校から 10 年間に集めた蔵書と推測できる。この時期の蔵書を検討することで、樟蔭高女が開校初期にどのような教育を目指していたのか見ることが可能となるだろう。

以下、この『原簿 1』を手掛かりに、蔵書がいつごろ出版された資料で構成されているのか、また、どのような分野の資料が積極的に収集されていたのか明らかにする。さらに、樟蔭高女のカリキュラムの関わりと、校長伊賀駒吉郎の蔵書形成への関わりについても検討を進める。

3.1　出版年からみた蔵書構成

蔵書はいつごろ出版された書籍から構成されているのだろうか。『原簿 1』に記された出版年が参考となる。出版年が記されている場合は、その年を採用した。記されていない場合は、大学図書館に現存する資料にあたり確認した。この手法によって出版年を明らかにすることが出来たのは 513 件、全体の 22%にあたる。なお『原簿 1』に情報がなく、かつ、図書館にも所蔵されていない 1789 件の出版年は不明とした。

さて出版時期を和暦で見ると、明治期が 57 件、大正期が 398 件、昭和元年と 2 年で 57 件となった[19]。樟蔭高女の開校は 1917（大正 6）年である。蔵書はこの大正期と昭和初期の資料を中心に構成されていたことが確認できた。樟蔭高女の教育方針には「最近文明の性質」を学ぶことと、「社会凡百の事象の大変化を来たしつつある今日」に対応できる知識の習得が掲げられている[20]。蔵書はこの教育方針を実現する

ために必要な、近時の書物を集めていたのである。

3.2　NDC 分類第一次区分からみた蔵書構成

次に、どのような内容の書籍が積極的に集められていたのか検討したい。日本十進分類法（以下、NDC）を用いてその傾向を見ていく。なお、NDC の分類番号は国立国会図書館所蔵資料に付された番号をあてた[21]。

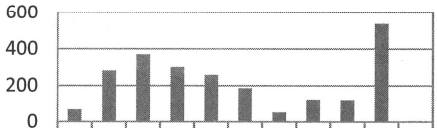
まずは、NDC の第一次区分（0～9）を利用して、蔵書がどのような分野の書籍から成り立っているかを確認する。各項目の該当件数と蔵書に占める割合を示したのが【表 1】「蔵書構成（第一次区分）」である。

【表 1】によると、該当件数が最も多いのは「9・文学」の 537 件で、全体の 23.3%を占めている。さらに「2・歴史」の 369 件（16.0%）、「3・社会科学」の 301 件（13.1%）が続く。これに対して、所蔵数が少ない項目には「6・産業」の 52 件（2.3%）や「0・総記」の 68 件（3.0%）、「8・語学」122 件（5.3%）となる。上位 3 項目に該当する書籍が全体の半分以上を占めていることから、樟蔭高女では人文学系の資料を中心に収集していたことが分かる。

ただし、当時の社会において「文学」や「歴史」の出版点数自体が著しく多かった可能性も考えられる。そこで、樟蔭高女が開校した 1917 年から、『原簿』に記録された最初の受入年の 1927 年までに出版された新刻図書を NDC 第一次区分に当てはめ、その割合を求めたのが【表 2】「出版図書の種類別割合」である[22]。

【表 2】で最も割合が高いのは「3・社会科学」の 27.2%、続いて「7・芸術」の 16.6%、

【表 1】蔵書構成（第一次区分）



	0 総記	1 哲学	2 歴史	3 社会科学	4 自然科学	5 工学	6 産業	7 芸術	8 語学	9 文学	不明
■タイトル件数	68	282	369	301	258	185	52	123	122	537	5

【表 2】出版図書の種類別割合

第一次区分	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
新刻出版図書種類別割合(%)	10.2	6.6	3.1	27.2	10.5	1.1	5.4	16.6	3.7	15.6	100

＊小数点以下第2位を四捨五入した。

「9・文学」の 15.6%である。これに対して割合が低いのは「5・工学」の 1.1%、「2・歴史」の 3.1%、「8・語学」の 3.7%である。

ここで注意したいのは、新刻図書の出版傾向と、樟蔭高女の蔵書傾向が一致していない点である。例えば「歴史」を見てみると、新刻図書では全体の 3.1%とそれほど多くないのに対して、樟蔭高女の蔵書では 16%を占めている。また「工学」も、新刻図書では 1.1%なのに対して、樟蔭高女では 8 %にのぼる。特に「工学」は、第二次区分に「59・家事」を含んでいることから、女子教育に関連性の高いその分野を、積極的に収集した結果といえるだろう。

もちろんこの逆もある。例えば「6・産業」や「0・総記」などは、樟蔭高女の所蔵割合の方が、新刻図書の割合よりも少ないことが分かる。

以上のことから、樟蔭高女の蔵書の偏りは出版点数の過多に由来するものではなく、積極的に収集した結果によるものと言える。

3.3　NDC 分類第二次区分からみた蔵書構成

次に蔵書の内容をさらに詳細に検討するために、第二次区分（00～99）に当てはめていく。該当件数が多い順に、上位 18 位まで並べたのが【表 3】「蔵書構成（第二次区分）」である。この表からも明らかなように、最も多く所蔵されている分野は、「91・日本文学」の 402 件（17.5%）。次いで「37・教育」の 154 件（6.7%）、「21・日本（史）」の 141 件（6.1%）の順となる。

ここで注目したいのは、全体の 2 割近くを占める「91・日本文学」である。もう少し詳しく第三次区分（000～999）まで見てみよう。すると「911・詩歌」が 132 件と、「日本文学」の 30%を占めていることが分かった。ここには葉山西思『和歌作法』（明文舘、1926）や佐佐木信綱『和歌に志す婦人の為に』（実業之日本社、初版は 1927）、金子元臣『古今和歌集評釈』（明治書院、初版は 1901）など、和歌に関する書籍が目立つ。和歌に次いで多かったのが、「913・小説」の 104 件である。ただし、小説と言っても、実際に樟蔭高女の蔵書に照らしてみると、いわゆる「小説」ではなく、古典文

【表 3】蔵書構成（第二次区分）

NDC	内容	タイトル数	割合（%）	NDC	内容	タイトル数	割合（%）
91	日本文学	402	17.5	12	東洋哲学	58	2.6
37	教育	154	6.7	43	化学	52	2.2
21	日本（史）	141	6.1	90	文学	50	2.2
15	倫理学	92	4.0	36	社会	43	1.9
28	伝記	91	4.0	72	絵画、書道	41	1.8
81	日本語	90	3.9	18	仏教	35	1.6
59	家事	85	3.7	52	建築学	32	1.4
29	地誌.紀行	81	3.5	93	英米文学	31	1.4
49	医学、薬学	73	3.1	38	民俗.風俗習慣	30	1.3

学が多いことに気づく。例えば坪内孝『雨月物語詳解』（共同出版社、1923）や小林栄子『源氏物語活釈』（大同館書店、1925）、吉村重徳『落窪物語新釈』（大同館書店、1925）などの古典類が多く見られた。

では、なぜ和歌や古典文学が、蔵書に多く含まれていたのだろうか。このヒントとなるのが、吉田文の指摘である。吉田は女学生に必要とされる教養について、次のように述べている。

> 伝統的世界における中・上層の女子にとって必要とされるのは「たしなみ」とよばれる教養の世界であった。和歌、習字、琴、生け花、茶の湯など多分に伝統的な技芸に属する領域であり、（…中略…）いわば「教養」であった。それは近代に入っても、容易に消滅するものではなく、モダンな近代学校に通う女学生にとっても必要とされる世界であった。
>
> 吉田文「高等女学校と女子学生」[23]

吉田は「和歌、習字、琴」などが、伝統的世界での「中・上層の女子」の「たしなみ」であり、これが「近代学校に通う女学生」にも、身につけるべき「教養」として引き継がれたと指摘する。

また、楫野政子は高等女学校の国語教科書の分析から、「「古典文学教材」の変遷には、いくつかのエポックがある。が、そこに、底流としてあるのは、女子の精神的自覚を促すという基本姿勢である」[24]ことを指摘する。

樟蔭高女の女学生もまた「ある程度、上層」に属する人々であった[25]。吉田が指摘する伝統的「たしなみ」や、古典教材に関わる書籍は、楫野が言うように「女子の精神的自覚を促す」意味でも、樟蔭高女の教育にとって必要性の高い資料であったと考えられる。「911・詩歌」（和歌関連）や「913・小説」（古典文学関連）は、樟蔭高女の教育方針に対応するために、積極的に集められていたものだろう[26]。

それでは、逆に、蔵書にはどのような書籍が含まれていなかったのだろうか。第二次区分に照らし合わせると、該当件数が0件と1件の項目は24項目あった。例えば「55・海事工学．造兵学」、「56・採鉱冶金学」、「63・蚕糸業」、「64・畜産．獣医学」、「65・林業」などである。

「海事工学」や「採鉱」などは、主として男性が従事する職業分野であることから、蔵書が0件なのも納得がいく。しかし、例えば女性が大きく関わった「蚕糸業」に関わる資料も収集していない。このことが示すのは、男女の性差によってのみ、蔵書内容が決定していたのではない、ということである。高女の生徒たちにとって、おそらく関わり合うことのない生産労働に関連する分野そのものが、収集の対象外にあったことが分かる[27]。つまり、多くの樟蔭高女生の属する「ある程度、上層」の社会的階層が、蔵書内容を決める一つの要因として働いていたと考えられる。

4. 樟蔭高女のカリキュラムと蔵書

ここまで樟蔭高女蔵書の特徴を見てきたが、重要なのは、それが学校カリキュラムにどのように対応していたかという点である。樟蔭高女の1週間の時間割を参考に、蔵書とカリキュラムの関わりを見てみよう[28]。授業数と科目名をまとめたのが【表4】「樟蔭高女カリキュラム」である。

最も授業数が多いのは、「裁縫」の49時間である。関連する分野の「59・家事」は85件（3.7%）の書籍が所蔵されている。次いで多いのが、「国語」の48時間である。「81・日本語」や「91・日本文学」などの分野を合わせると、492件（21.3%）が確認できる。また「外国語」の時間数も34時間と多いが、「83・英語」や「93・英米文学」に該当する資料は44件（2%）と少ない。これは注（18）に記したように、本研究では洋書目録を省いていることが要因と考えられる。なお、「体操」も30時間と多いが、「78・運動競技」に当たる資料は14件とごく少数であった。このように、積極的に収集される書籍と、授業数は必ずしも一致していないことが分かる。

ただし、裁縫や体育が実技科目であったことを看過すべきではない。それらの科目には、何より実習を行い技術をみがくための図書室以外の教育施設が重要だった。例えば「裁縫」は、最先端の足踏みミシンを備えた裁縫室が設けられていた。また「体操」には、木煉瓦敷きの広い運動場が備えられ、教育環境が整えられていた[29]。そのため予算の配分の問題として、図書室での書籍購入の支出が抑えられていたと考えることができる。

一方で、国語は時間数が多く、それに比例して蔵書数も豊富に用意されていた。蔵

【表4】樟蔭高女カリキュラム（1923）

	学年	修身	国語	外国語	地理歴史	数学	理科	図画	家事	裁縫	音楽	体操	教育	哲学	法制経済	自然科学	
本科	1	2	6	3	3	2	2	1	0	4	2	3	0	0	0	0	28
	2	2	6	3	3	2	2	1	0	4	2	3	0	0	0	0	28
	3	2	6	3	2	3	3	1	0	4	1	3	0	0	0	0	28
	4	1	5	3	2	3	3	1	2	4	1	3	0	0	0	0	28
	5	1	5	3	2	3	3	1	4	4	1	3	0	0	0	0	30
専攻科	1	1	4	3	0	0	2	0	4	10	1	3	2	0	0	0	30
	2	1	3	3	0	0	2	0	5	10	1	3	2	0	0	0	30
高等科	1	1	5	5	4	2	0	0	2	3	1	3	2	0	0	2	30
	2	1	4	4	3	2	0	0	2	3	1	3	0	2	2	3	30
	3	2	4	4	0	2	0	0	2	3	1	3	2	3	2	2	30
計		14	48	34	19	19	17	5	21	49	12	30	8	5	4	7	292
割合(%)		4.8	16.4	11.6	6.5	6.5	5.8	1.7	7.2	16.8	4.1	10.3	2.7	1.7	1.4	2.4	100
		292	292	292	292	292	292	292	292	292	292	292	292	292	292	292	

書の 20%以上が「国語」に関する分野で占められていることからも、図書室は学生の好奇心や学びを支える役割を十分に果たし得る存在であったと言えるだろう。そのことは、次の様な資料からも確認できる。例えば、1925 年に樟蔭高女に入学した植田正子の日記には、図書室を利用して、蔵書を国語の学習に役立てている様子が生き生きと記されている。

> 自習の時間は図書室で、国語の時間に一部習ったのを全部読みたいと貪欲に本あさりをする。樋口一葉の「たけくらべ」「にごりえ」「十三夜」（…中略…）鴨長明の方丈記、「行く川の流れは絶えずして、しかも本の水にあらず」何て素晴らしい一言。森鷗外の「うたかたの記」、藤村の「千曲川」国語の教科書にひき続いて次々と読みたくなるものばかり、忙しい事だ。
>
> 植田正子『橘』(30)

日記には、「たけくらべ」や「にごりえ」などの作品名や、鴨長明や森鷗外、島崎藤村といった作家名も見ることができる。ここには、国語で習った作品を読もうと、図書室で「貪欲に本あさり」する様子が描かれている。図書室では授業で喚起された好奇心を満たす事が可能であった。

また少し時代は下るが、田辺聖子が利用したのも、この図書室であった。田辺は「樟蔭女専の図書館はかなり充実していた。私は女学校からこの女専へはいるが早いか、図書館にかじりついて、世界文学全集を読み上げるのにかか」り、図書室に「しげしげ出入りした記憶がある」と記している(31)。

5. 蔵書形成と伊賀駒吉郎の関わり

第 1 節でも見たように、樟蔭高女には設立当初から「生徒図書室」や「会議室兼図書室」が設けられていた。これら図書室に備える書籍を収集し、蔵書の基礎を形成したのが校長伊賀駒吉郎であった。

彼の記した「本校創立経過一斑」に、蔵書形成について述べている箇所がある。以下、関係する部分を引用した。なお旧字は新字に改めた。

> 職員の生命とも云ふべき書物は、私が上京した序に、数千円を投じて、思ひきり買込んだ。（…中略…）之れに校印を捺し、レッテルを貼り、精細に分類して、書籍台帳を作ると云ふことは、大変な仕事で、潮田氏を始め、藤澤、永山二書記の如きは、二ヶ月許りは、全く忙殺されてしまつた。
>
> 私立樟蔭高等女学校校友会『樟蔭』(32)

ここから、伊賀が数千円に及ぶ書物を購入していたが分かる。その書物を、潮田氏をはじめ3名の職員が、「校印」を捺し、「精細に分類」しつつ書籍台帳を作成したという。当時の数千円は、現在の数百万円に相当する高額な値段である[33]。校長伊賀が樟蔭蔵書の基礎形成に大きな影響を及ぼしていたことがわかる。

では伊賀はどのような考えから、その蔵書を形成しようとしていたのか。参考になるのは彼の教育観である。住友元美は「伊賀駒吉郎の女性教育論」で、伊賀の女子教育論の特色を次の様にまとめている[34]。

- 男性が生産（職業）、女性が消費（家事・育児）に従事する「自然分業」を前提とした。
- 「婦人の人格を高くし其の天職を完全に尽くさしめる」ことを目指した。
- 女性は母であり消費者（家事・育児）としての役割りを果たすべきとする同時代の平塚らいてう、エレン・ケイ、山田わか等の主張と共通していた[35]。

問題は、こうした伊賀の女子教育論が蔵書にどのように反映されたかである。そして、確かに蔵書には、本間久雄（1886－1981）・山田わか（1879－1957）・与謝野晶子（1878－1942）・奥むめお（1895－1997）等、伊賀の教育論に近い教育論者や著名な婦人運動家、評論家の著作を見つけることができる[36]。一方で、参考までに記すと、明治期女子教育の基礎図書とされる『明治孝節録』（1877）や『幼学綱要』（1882）、『婦女鑑』（1887）などは含まれていなかった[37]。これらは「国家主義に基づく儒教主義的な女子教育の思想」の形成を担ったとされる書籍である。

以上のことから、校長伊賀は自身の教育論に近い論者の著作を収集し、一方で明治期の代表的な女子教育論に関わる書籍は除いていた。自身の目指す教育を、蔵書形成においても実現しようと試みていたのである。

おわりに

本稿では、学校教育を支える物質的基盤として、図書室の蔵書に着目した。蔵書の性質と学校教育との関わりを検討して、明らかになったのは次の4点である。

- 蔵書は同時代の書籍を集めることで、「現代文明」に対応可能な女性の育成という樟蔭高女の教育方針を支えていた。
- 蔵書内容は「日本文学」を中心に人文学関連分野、さらに「家事」などを幅広くカバーしていた。これは樟蔭高女がめざす教育とも合致していた。
- 教授科目との関わりでは、「国語」を中心に、「家事」、「歴史地理」に関する書籍が重点的に集められていた。

・蔵書形成には校長伊賀駒吉郎が深く関わっていた。特に伊賀の女子教育論に近い論者の書籍が積極的に収集されていた。

なお、今後の課題として、同時代の他の高等女学校蔵書と比較検討することで、樟蔭高女の蔵書の特色をより明確にする必要がある。また、その蔵書が地域の人々や父兄の意向と、どのように関わっているのか明らかにする必要もある[38]。

［付記］
『図書原簿』をはじめ、図書館関連諸資料の閲覧には、大学図書館司書の丸谷初江氏、岩崎友香子氏に便宜をおはかりいただいた。また学園資料の調査、閲覧にあたっては、学芸学部国文学科白川哲郎教授と、100周年記念事業本部の梶田美法子氏にご指導いただいた。記して感謝申し上げたい。最後になるが、大学図書館での蔵書調査は、国文学科4回生の田畑果奈実さん、宮原温美さんの協力を得て実施することができた。丁寧に作業に取り組んでくれたことに感謝したい。

（注）

（1）1918年の「全国高等女学校実科高等女学校ニ関スル諸調査」によると、同年の樟蔭高等女学校の「生徒定員」は800名と大阪府下最大であった。ちなみに大阪府立の女学校の定員は600名。佐々木享監修『文部省教育統計・調査資料集成』（大空社、1989年、42頁）

（2）大日本印刷制作『樟蔭学園80周年記念誌』（樟蔭学園、1997年、12頁）

（3）鞆谷純一「三好高等女学校「婦人図書館」」（『図書館文化史研究』23、2006年3月）

（4）澁谷歩「宮城県塩釜女子高等学校図書室の蔵書考」（『叡智の社』4、2007年3月）

（5）例えば、実践女子学園一〇〇年史編纂委員会編『実践女子学園一〇〇年史』（実践女子学園、2001年）や、一三〇年史編集委員会編『跡見学園一三〇年の伝統と創造』（跡見学園、2005年）等がある。

（6）磯部敦（他）「大礼記念文庫の書籍文化環境」（『書物・出版と社会変容』16、2014年3月）

（7）前掲注（6）、21頁。

（8）日本国語大辞典「大阪樟蔭女子大学」の項目。JapanKnowledge, http://japanknowledge.com,（確認日 2019年1月6日）。樟蔭高等女学校については、大阪樟蔭女子大学編『樟蔭の窓』（大阪樟蔭女子大学出版部、2011年）に詳しい。

（9）大阪樟蔭女子大学編『樟蔭の窓』（大阪樟蔭女子大学出版部、2011年、24頁）

(10) 前掲注（9)、34 頁。

(11) 私立樟蔭高等女学校『私立樟蔭高等女學校新築落成記念帖』(1918 年)

(12) 大阪樟蔭女子大学図書館編『図書館年譜』(大阪樟蔭女子大学図書館、2005 年、巻末資料)

(13) 日本図書館協会図書館調査事業委員会編『日本の図書館』(日本図書館協会、2017 年、296 頁)

(14) 貿易広告社制作『樟の輝き』(樟蔭学園、1987 年)、大日本印刷制作『樟蔭学園 80 周年記念誌』(樟蔭学園、1997 年）等。

(15) 前掲注（12)、4 頁。

(16)『原簿』はすべて大学図書館事務室に保管されている。現在でも『原簿』に登録された資料を除籍する場合は、除籍情報が記録されている。

(17) 現在も大学図書館に所蔵されている資料にも直接あたったが、受入年月日に関する情報は記されていなかった。

(18) なお、洋書は『原簿 2』に一括で 600 件記載されているが、「書名」のみの記載が大半であり、今回の検討には含めていない。

(19)『露西亜文学研究』(井上伸）のみ、出版年が昭和 3 年と記録されている。そのため昭和 3 年の書籍も 1 件含まれている。

(20) 樟蔭高等女学校『私立樟蔭高等女学校写真帖』(1919 年、8 頁・16 頁)

(21) 参考にした国立国会図書館所蔵資料の多くは、NDC の第 6 版が当てられている。そのため本研究でも NDC の第 6 版を使用する。また、国立国会図書館が所蔵していない資料については、他館の分類番号を参照し稿者が付した。ただし、判断がつかない次の 5 件は「不明」とした。好文会同人『彩雲』(精華堂書店、1916 年)、文部省『競争指針』(出版社、出版年不明)、後藤脩『国史グラフ』(出版社、出版年不明)、宿利重一『公開状』(出版社、出版年不明)、川野宗太郎『処世と修養実際物語』(出版社、出版年不明)。

(22) 牧野正久「年報『大日本帝国内務省統計報告』中の出版統計の解説（上)」(『日本出版史料』1、1995 年 3 月、59 頁から 63 頁参照)「新刻出版図書種類別」の項目を NDC 第一次区分に当てはめ割合を算出した。

(23) 青木保（他)『近代日本文化論 八』(岩波書店、2000 年、126 頁)

(24) 楫野政子「「高等女学校国語教科書―古典教材」にみる近代」(『日本文学』53 (12)、2004 年 12 月、21 頁)

(25) 前掲注（14)、『樟の輝き』、33 頁。学生の社会階層について「ある程度、上層だったと思うんです。特に樟蔭はいわゆるいい家庭から来た人が多かった」との証言がある。

(26) 植田正子『橘』(植田正子、1968 年)。学校で和歌や古典作品を学ぶ様子が記されている。「片山先生は作文の時間に和歌を教えて下さる。（略）私達も皆妙ち

くりんな和歌を書きました」(27頁)、「文芸会のために、古今集、伊勢、太平記と和歌や、古典の下調べ。学年末の忙しさがおしせまる」(103頁) など。

(27) 将来家庭の主婦となり、また母となるうえで必須の家事労働に関わる「59・家事」は85件と積極的に集められている。

(28)「専攻科設置及全学科課程並授業料額認可申請書」(1923年3月21日、蒲田栄吉文部大臣宛) の控え。樟蔭学園所蔵資料。ファイル名「樟蔭学園資料写真」、資料名「重要書類樟蔭高女」、資料番号「00132」、サムネイル番号「01327-01340」。

(29) 前掲注 (2)、16頁参照。この他、注 (11) にも詳しい。

(30) 前掲注 (26)、68-69頁。

(31) 井上靖 (他)『読書と私』(文藝春秋、1980年、131頁)

(32) 私立樟蔭高等女学校校友会『樟蔭』(1919年、9頁)

(33) 岩瀬彰『「月給100円サラリーマン」の時代』(筑摩書房、2017年) を参考にした。

(34) 住友元美「伊賀駒吉郎の女性教育論」(『大阪樟蔭女子大学学芸学部論集』43、2006年3月、195-196頁)。

(35) エレン・ケイ (1849-1926)。スウェーデンの教育者、婦人運動家。日本の婦人運動に大きな影響を与えた。伊賀は樟蔭高女の教育方針を「エレン・ケイ女史一派」の主張に沿うものと説明している。

(36) 例えば本間久雄『エレンケイ思想の真髄』(1915)・『最新社会問題十二講』(1919)、山田わか『社会に額づく女』(1920)・『愛と生活と』(1920)、与謝野晶子『人及び女として』(1916)・『愛理性及勇気』(1921)、奥むめお『婦人問題十六講』(1925) など。

(37) 志賀匡『日本女子教育史』(玉川大学出版部、1960年、360頁)

(38) 大阪府立図書館は、前掲注 (36) 掲出の資料と、明治期女子教育を支えた資料のいずれも所蔵している。したがって樟蔭高女が目指した図書室のあり方と、地域の人びとが公共図書館に求めたニーズとの間には差があったことも確認できる。